

## 「みんなで作ろう 能登のわ」

- ◆期 日 平成22年9月1日（水）～4日（土）【3泊4日】
- ◆会 場 羽咋市（国立能登青少年交流の家、永光寺、柴垣海岸）
- ◆対 象 中・高校生10名
- ◆参加者 16名（中学生2名、高校生14名）
- ◆主催 国立能登青少年交流の家
- ◆後援 新潟・富山・石川・福井・滋賀各県教育委員会
- ◆協賛 ワンネス高等学院、NPO法人ワンネス・スクール

### 1 趣旨

- (1) 不登校傾向にある中・高校生が、普段の生活から離れ、能登の環境の中で過ごすことで、社会的自立やコミュニケーション能力を育成する。

### 2 ねらい

- (1) 様々な体験活動を通じて、自分でできることを増やし、何事も最後まで根気強く取り組む力を身に付けることができる。
- (2) 一緒に体験活動をする仲間や大学生、地域の方々との交流を深めることにより、相手に対する思いやりや絆、感謝の気持ちなど、人と人との接し方を自覚することができる。

### 3 活動の概要

【9月1日（水）】 場所…国立能登青少年交流の家

13:30 開講式

14:30 アイスブレイク・ラボラトリ方式の体験学習



#### アイスブレイク・ラボラトリ方式の体験学習

森から取ってきた木々と新聞紙、セロハンテープを使って「新聞紙タワー」を制作した。各班それぞれアイディアを出し合い、特徴のあるタワーを完成させることができた。

【9月2日（木）】 場所…国立能登青少年交流の家

9:00 アーチェリー・七宝焼（選択活動）

13:30 カッター

19:00 天体観測



#### アーチェリー

初めての体験ということで、楽しみにしていた生徒が多かったようであった。なかなか思うところに的を当てることができず、何度も挑戦している姿が見られた。



#### 七宝焼

それぞれデザインを考えて、七宝焼のキーホルダーを制作した。集中して真剣に取り組む姿が印象的だった。



#### カッター

お互いに声を掛け合い、うまくそろえてこぐことができた。講師の方より、チームワークがよかったと評価していただいた。



#### 天体観測

空に雲が広がり、実際に望遠鏡を使って星を観測することはできなかった。そこで、天体に関する話を、映像を使って、視聴覚室で聞いた。

【9月3日（金）】 場所…能登青少年交流の家、永光寺（羽咋市酒井町）

9:00 火おこし体験、野外炊飯

14:30 坐禅体験



#### 火起こし体験

火種を作ることは、ほぼ全員できた。お互いに声を掛け合ったり、息を吹く順番を代えたりして、その火種から麻ひもや綿に火をつけることを試みたが、結局うまく火をつけるまでには至らなかった。



#### 野外炊飯（カレーライス作り）

それぞれの班でお互いに協力して役割を分担し、おいしいカレーライスを作ることができた。



#### 坐禅体験

雰囲気のある坐禅場で足を組み、静かにして45分間過ごした。あっという間で短かったという感想が多く聞かれた。途中、肩を叩かれる人もおり、いい体験となった。

【9月4日（土）】 場所…柴垣海岸、能登青少年交流の家

6:00 地引き網体験

9:00 地引き網で獲れた魚の調理

11:20 閉講式



#### 地引き網体験

参加者だけでは網が重くて引き上げられず、地元の漁師さんとスタッフも手伝って引き上げた。この日は大漁で、スズキ、タイ、キスが獲れた。



#### 地引き網で獲れた魚の調理

獲った魚は全員、包丁を使ってさばいた。初めて体験する生徒もいたが、コツをつかみ、熱心に取り組んだ。なお、さばいた魚は塩焼きにして食べた。

## 4 事前・事後調査による事業分析

事業評価を目的とし、参加者16名を対象に事前・事後における変容を把握するため、調査を実施した。有効回答数は11名分である。調査項目は事業の趣旨をふまえ、「達成動機測定尺度」23項目と「自己肯定意識尺度」41項目を使用した。

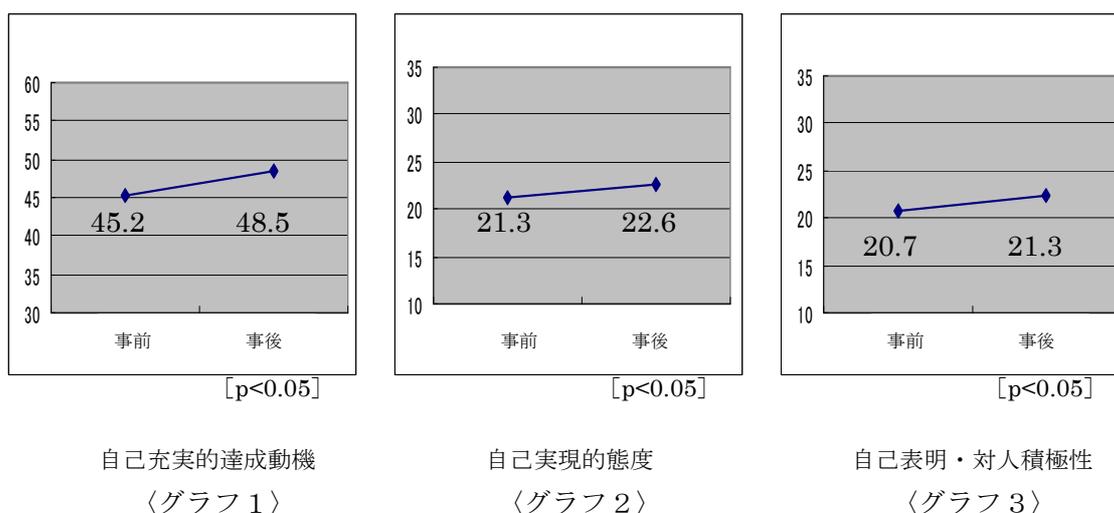
まず、「達成動機測定尺度」は、本来は23項目あるが、そのうち「競争的達成動機」は、本事業のねらいとは異なるため、「自己充實的達成動機」のみを使用した。

また、「自己肯定意識尺度」は、対自己領域と対他者領域に分けて測定するものである。対自己領域としては、「自己受容」、「自己実現的態度」、「充実感」、対他者領域としては、「自

己閉鎖性・人間不信」、「自己表明・対人的積極性」、「被評価意識・対人緊張」と、それぞれ3つの小領域がある。

それぞれの領域ごとに合計得点の平均値を算出し、事前事後で比較した。

その結果、「達成動機測定尺度」においては、「自己充実的達成動機」〈グラフ1〉、また、「自己肯定意識尺度」においては、対自己領域の「自己実現的態度」〈グラフ2〉、対他者領域の「自己表明・対人的積極性」〈グラフ3〉の平均値について、5%水準で有意差が認められた。



「自己実現的達成動機」では、〈別表1〉に示すとおり、13項目で構成されている。(それぞれの項目の回答方法については、※を参照。以下同様。)

この事業を企画するのにあたり、カッターや地引き網のように、集団活動を通じて目標が達成されるというプログラムだけではなく、アーチェリーや坐禅体験のように、個々の活動を通じて目標が達成されるというプログラムも行えるようにした。集団生活が苦手な生徒でも、この事業の中で目標を設定して達成できるように配慮したことが、「自己充実的達成動機」の向上に結びついたと考えられる。

そして、それらの目標が達成されたかどうかを検証するのが、対自己領域の「自己実現的態度」〈別表2〉である。計7項目で構成されている。

向上されたことはグラフ上で明らかになったが、中でもカッターの達成度は、生徒達の活動の様子を記した観察記録からも確認された。自分から進んで行動できない生徒でも、周りの仲間とお互いに声を掛け合わせて、休むことなく一生懸命オールを漕ぐ姿が見られた。これは、講師の方が、生徒達の様子を見て、できるようになったら大いに褒めるというやり方で進めたことが反映していると考えられる。生徒達の達成度を高めるために、指導者は、常に褒めることを意識して指導することは大切である。課題を抱える青少年を指導する上では、特に求められるであろう。

対他者領域の「自己表明・対人的積極性」では、〈別表3〉に示すとおり、7項目で構成

されている。

2日目の夜、3日目の夜のプログラムについて、スタッフミーティングでは話し合った結果、生徒達に疲れが出てきていることから、当初予定していた「キャンプファイヤー」を中止して、早めに休むことにした。そして、そのことを3日目の朝に、全生徒に伝えた。この時、生徒達からは何も意見は出なかった。

ところが、夕方になり、ある1人の生徒が、夜も何か活動ができないかと担当者に伝えにきた。そこで、キャンプファイヤーではなく、参加者とスタッフが1つの部屋に集まって自由に気軽に語り合える場を持つことを提案したところ、全参加者、スタッフ共に理解してもらい、急きょ実施することになった。部屋の中では、一緒にトランプをしたり、自分こと、過去のこと、将来のことなどをお互いに話し合ったりして、有意義に時間を過ごせた。想定外の出来事であったが、参加者、スタッフからは好評であった。こういった場の設定ができたことが、「自己表明・対人的積極性」の向上の1つにつながったのではないかと考えられる。

※それぞれの項目について、

5. あてはまる。
4. どちらかといえばあてはまる。
3. どちらともいえない。
2. どちらかといえばあてはまらない。
1. あてはまらない。

のうち、あてはまるものを1つ選ぶ。5. を選んだ場合は、5点とし、4. は4点、以下 … 1. は1点とする。

〈別表1〉

1. いつも何か目標をもっていたい。
2. 決められた仕事の中でも個性を生かしてやりたい。
3. 人と競争するより、人と比べることができないようなことをして自分を生かしたい。
4. ちょっとした工夫をすることが好きだ。
5. 人に勝つことより、自分なりに一生懸命やることが大切だと思う。
6. みんなに喜んでもらえる素晴らしいことをしたい。
7. 何でも手がけたことは最善をつくしたい。
8. 何か小さいことでも自分にしかできないことをしてみたいと思う。
9. 結果は気にしないで何かを一生懸命やってみたい。
10. いろいろなことを学んで自分を深めたい。
11. 今日1日何をしようかと考えることは楽しい
12. 難しいことでも自分なりに努力してやってみようと思う。
13. こういうことがしたいなあと思うとわくわくする。

〈別表2〉

1. 自分の夢をかなえようと意欲的に燃えている。
2. 情熱を持って何かに取り組んでいる。
3. 前向きの姿勢で物事に取り組んでいる。
4. 自分のよい面を一生懸命伸ばそうとしている。
5. 張り合いがあり、やる気が出ている。
6. 本当に自分のやりたいことがなんなのか分からない。(逆転項目)
7. 自分には目標というものがない。(逆転項目)

〈別表3〉

1. 相手に記を配りながらも自分の言いたいことを言うことができる。
2. 自分の納得のいくまで相手と話し合うようにしている。
3. 疑問だと感じたらそれらを堂々と言える。
4. 友達と真剣に話し合う。
5. 人前でもこだわりなく自由に感じたままを言うことができる。
6. 人前でもありのままの自分を出せる。
7. 自主的に友人に話しかけていく。

[参考引用文献]

堀 洋道・山本 眞理子、心理測定尺度集Ⅰ人間の内面を探る〈自己・個人内過程〉、サイエンス社、p16-p22

堀 洋道・吉田 富二雄、心理測定尺度集Ⅱ人間と社会のつながりをとらえる〈対人関係・価値観〉サイエンス社、p63-p67

## 5 成果と課題

### (1) 成果

- ・ この企画事業を通じて、参加者の「自己充實的達成動機」、対自己領域の「自己実現的態度」、対他者領域の「自己表明・対人的積極性」が向上したことから、この企画事業のねらいを達成させることができた。
- ・ 1日目終了後と最終日終了後に、ボランティアスタッフで参加者の実態を付箋に書いて模造紙に貼り、図面で表した。その2つの図面を比較した結果、4日間の体験を通じて、意欲が向上したこと、笑顔が増えたこと、信頼関係が深まったことが明らかとなった。〈別表4・5〉
- ・ この事業の対象者が、不登校傾向にある青少年であることから、事業の途中でリタイヤすることも予想されたため、参加するのにあたっては、全日程の参加にこだわらず、日帰りや1泊2日でも参加できるように配慮した。その結果、2日目に実施

したプログラムであるアーチェリー、カッターは、初めての体験することであったため、興味・関心が高く、16名が参加した。終了後の満足度も高かった。

## (2) 課題

- ・ 猛暑の影響もあり、3泊4日の全日程に参加させることは、身体的にも精神的にもきつかった。2泊3日であれば、全日程参加できる生徒が増えたと考えられる。
- ・ プログラムの進め方について、もう少しゆとりを持たせた方がよかった。早朝より夕方まで十分に活動した日の夜の活動は、全参加者が自由に気軽に語り合えるような場を設定するといったプログラムを取り入れることが望ましい。また、そのようなプログラムを導入することで、「自己表明・対人的積極性」の向上につながることをいかに検証するのか、今後考えていく必要がある。
- ・ 予想していたよりも、途中から参加する生徒、途中で帰る生徒が多く、班編制がうまく機能しなかった。そのため、ボランティアスタッフの役割が曖昧になってしまい、参加した生徒達とのかかわり方が難しかった。このような事業を展開するのにあたっては、班という枠を設けずに、参加者とボランティアスタッフが1つになって運営できるように配慮した方がよい。

## 6 参考（感想）

〈参加者より〉

- ・ 3泊4日という長期間、宿泊体験をしたのは初めてであり、印象に残った。
- ・ 今回、事業に参加したことを生かして、人ともっと話せるように自分を出していきたい。
- ・ 今後は、目標を立てて、その目標が成し遂げるようになりたい。
- ・ 坐禅体験が印象に残った。肩を叩く音を聞いてびっくりした。背筋が伸びた。
- ・ ボランティアに関心を持っている。実際に、子ども会のボランティアとして関わったこともある。今回関わってもらったボランティアスタッフの方の動きを参考にし、生かしてみたい。

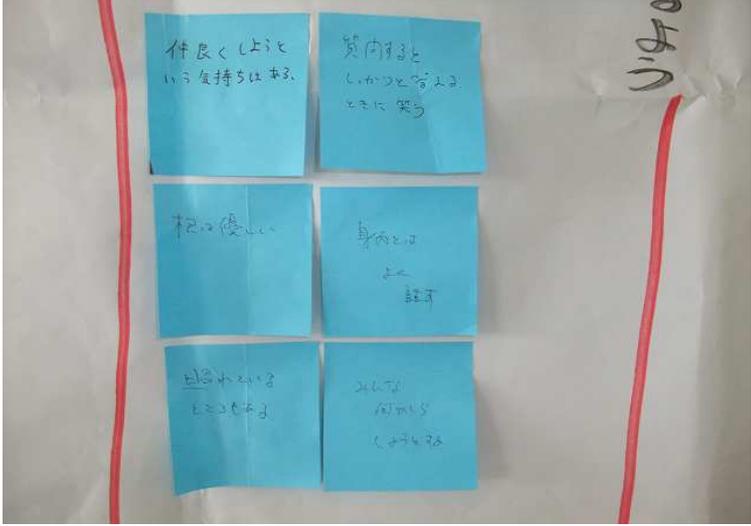
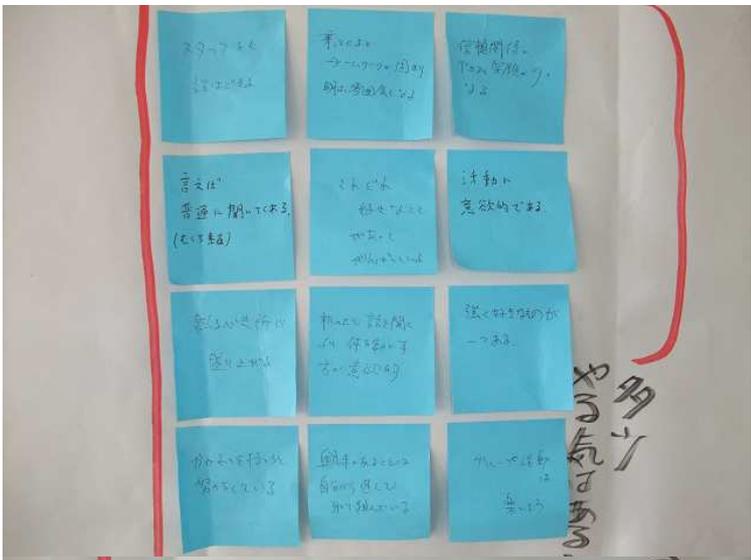
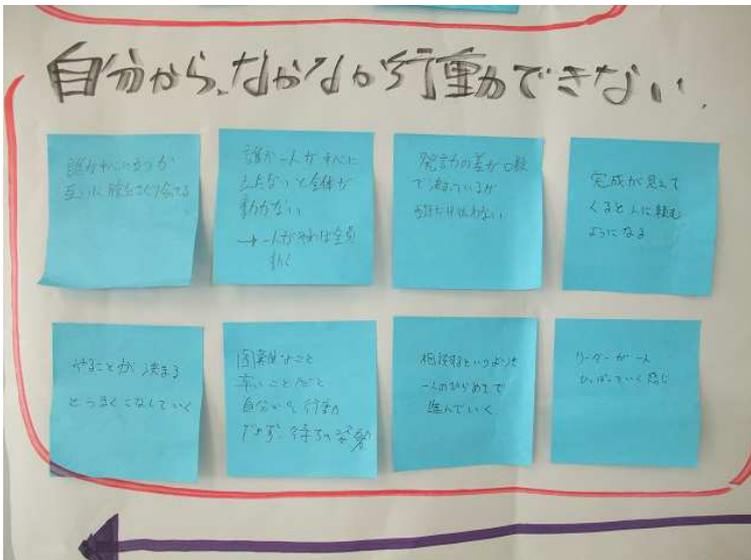
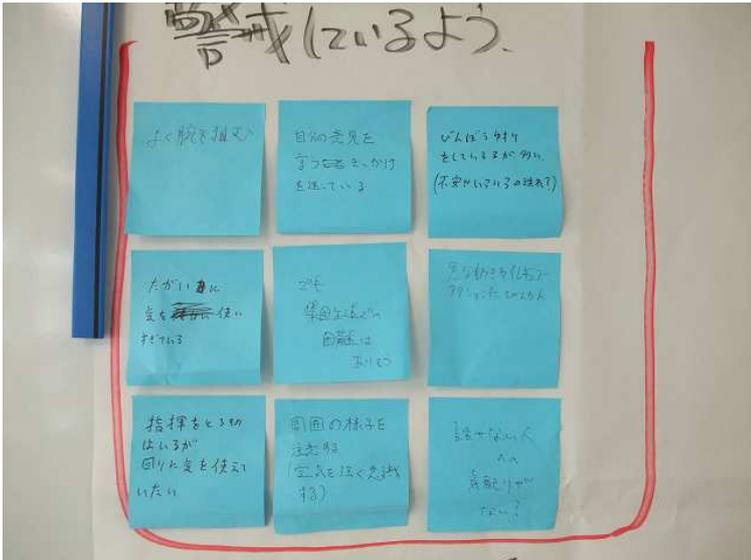
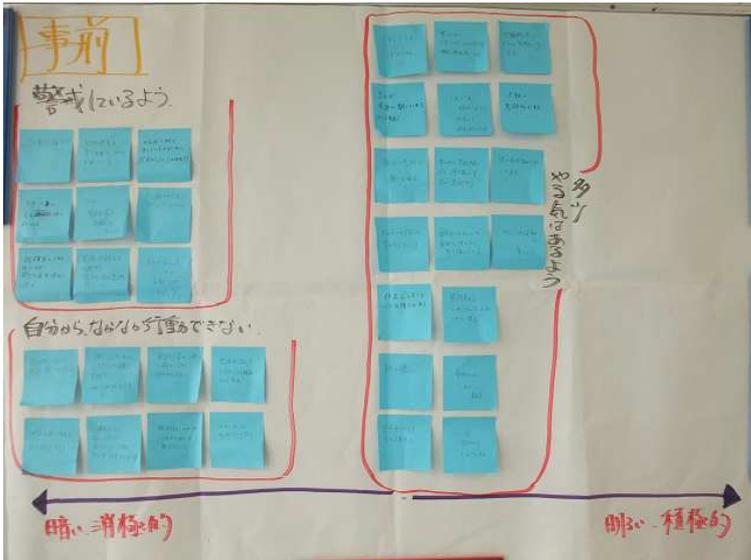
〈ボランティアスタッフより〉

- ・ 参加者が、不登校傾向にある青少年ということで、初対面の時、内気な生徒が多いように感じたが、活動を通じて、思っていたよりも意欲が高くなって驚いた。
- ・ 不登校傾向にある青少年と接する際の態度として、先入観や一方的な情報よりも、自ら考え、一緒に経験した方が、自信や勇気につながると思った。
- ・ 事前研修について、生徒達との関わり方だけでなく、アーチェリーや野外炊飯など、それぞれのプログラムの進め方についても、もう少し詳しく言ってほしかった。実際に生徒達と活動をしていて、尋ねられた時、どう説明すればよいのか戸惑ってしまうことがあった。
- ・ 不登校傾向にある青少年が、想像していたよりも普通であり、普通にしているように見えるからこそ、問題点が分かりにくいという難しさに気づくことができた。
- ・ この事業を通じて、もっと子ども達と一緒に活動をしたり、指導したりする機会を

増やしていきたいと思った。

- いろいろと大変なことや初めてのことが多く、戸惑うこともあったが、とてもよい経験となった。最後のあいさつでは、とても寂しくなってしまった。

〈別表4〉



〈別表5〉

